



源氏物語繪巻



本草綱目

本草綱目



源氏物語系圖

大上天皇

桐壺の巻より御位少く久しくありらば
養老より御位と東宮よりありてありあはれ
桐壺の御門より柳巻より崩御霜月一日二
日以死

前坊

内子奥あり

お院の御門よりありて養老よりあり

桃園式部御宮

藤原よりありて中勢のまゝあり

権斎院

母

柳巻よりありてありてありてあり



文の衣服よりいふとゆかりおとせ給ふ桃葉をよ
よゆりの女め文とわひし海と給ふくれおとせよ
中髪ゆり源氏よんはうてやまひ一人也
お院のせし川ゆりゆりの女三文源氏乃ちうとめ
夕雲のゆりのうも橋政うせ給て後ゆり
ゆりておろうゆりゆりゆりゆり

橋政小方

女五宮

綱敷の歌院と桃葉をよひんくわひしとせ
給ゆり中納敷の歌よんゆり着の源内化を
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

朱雀院

母三三殿のまのここのま三條を改て院の女

桐壺の歌よあまよゆり養の歌よゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
あまよゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

六條院

母桐壺をよ梅葉を大納女

桐壺の歌よゆり三葉ゆりゆり着袴同年の秋
母中息而よゆり給六ゆり母このゆり小の方
よゆり給てゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
その取引入るたのまゆりゆり
第一本の中よ近侍中ゆり紫雲まゆり
貴中ゆり 同巻よ宰相ゆり養の歌よゆり

おと安田様をより内侍のうん乃君の事一々して
法王の事乃三月は括列法王の浦へおしじこ給
次の年乃三月は播磨國明石の浦へはらひ給
又の年の秋法門の由長よりさきより人されまひ
て福なく幸の位はあつたより敷のふれ入納まよ
お給身とけくらの事より内侍はお給言の事よ
牛車とゆりて文中とつて入まひし女の事よま
大は回きよ忠仁公の例あつて准三后の立旨と
下より帝の護持信のりさうせなりしとて紙
思食て者のうらうらの事よた下のれとあつて
めくたふとひくちよとまのまはよるま
て院よりうらまぬ給りりまふと法王の事
完

くれ給り 白兵部右の事よるくよりまゑと
二人のつきとてまうとて

堂共部御宮

おまを奥よりうらと

えハ仲の文とまゑとさし女の事よ朱雀院より幸の
時共うはほとまうらの内侍乃人の事より
とほくし人お梅の事ようせ給りてんより

兼香殿四宮

紅雲の事乃事よ童として秋風亦舞給り人
也そのくらの事よと

帥宮

堂の事よ法原院の馬場の事よまうら
るの事よれし目堂の事よまひまうりてん

して宰相よりなり 中將めえ 行はせよ中納言
二月の御成りのは権左衛門右衛門と
とありの御成りといひ世の御成りといひ
振舞まらぬ御成りの中納言なり

一 明石中宮 母明石の通前膳所守母

身とつづきのまよひ明石の浦めとて冷泉院
のまよひ母よは具してまよひのりて桂の里に位
治一とて冷泉院のまよひは二條院へいりて
まよひのり冷泉院のまよひはまよひのり
十四のまよひとまよひのり相産の女御とて
法のまよひ中納言とて

右衛門將 母右衛門白鳥のまよひは冷泉院のまよひのりて
中宮の御成りといひ

中納言 母二人のりてのりて

源宰相中將 母三條上院は長女

えい義人が將といひて行はせよ三位中納言
は宰相 中將めえ 冷泉院のりて乃女御よは
は宰相

侍從宰相 母

梅姫よ白鳥の御成りは御成りといひ

以中將 母

妹のまよひはまよひのりて冷泉院のりて
の御成りといひ

太夫弁 のりてのりて一人

権中將 日

右中弁

竹河のきくは正月よりゆくの侍もあつて
らの内約りていひし人あつてしりし人

四位少将

一あまのいさむらひの付横川の信朝のいし中
のいせり人

義人義勝佐

物次信よつりしりし人

侍従

竹河乃正月より内侍のうしといひし人あつてしりし人

美文女御

母宰相中ねの目

うりの中ねのきくは入ま

中書

母後任人相お女

今の白文
うりの中ねのきくは兵部卿の文り兄のうしといひし人

は女給りし母の一條文書しりし人

六君

母後内侍のしげ春後雅光の女

一條の文書しりし人言書りし文のいさ

今上

母最善殿女御なる后 いさむらひのいさむらひ

明石のきくは二歳とてうり身もはくしり
きくはあまのいさむらひのきくは二月よりいさむらひ
業きくは位よつりし人

女一宮

母下藤

美業きくはいさむらひ

落葉宮

母下藤の衣

院西山の御寺よりつり給へし御着葉の巻よ花
木権六納言の御方も御給替りせし後之音
のふね給んはまうし給く後之御方の巻より
一葉の巻よめし巻より給束の巻二葉の巻
事思ひしはしは着葉とあおはししは
し一人也 小野の二文

一品内親王

西母之帝の孫氏又着葉の女流よあひ

西山よこのは着葉まよは孫氏のよはつりて
院つりしつり給同巻よ二葉一給六葉院よ
ゆりりくわしひの目福よ着替りつり
り女房よつりひてゆの給福よの巻よつり
と給よせしつり同巻よつりつりつりつり
山つりしつりつりつりつりつりつり

女四宮

東宮

母明名の中又六院院の由女

これ巻よせしつりつり同巻よつりつりつり

二宮

母あまの

自あつたの巻よつりつりつりの中巻よつりつり
院の巻よつりつりつりつりつりつりつりつり
あま

白共部御宮

西母まの

若宮

母宮信文御女中若

自あつたの巻よえ巻して巻よつりつりつり
上の巻よつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつり

夢の夢よは秋文よまは給は兼十四みまは給し
よは位ゆりよはまは給は兼十四みまは給し
法合よ法成の法よまは給は兼十四みまは給し
よは位ゆりよはまは給は兼十四みまは給し
よは位ゆりよはまは給は兼十四みまは給し

● 豊兵部卿宮

宰相中給 母番女院文

梅之文のきよは四位侍従と申す由行海客よは二位中
お同きよは宰相中給ぬえ

侍従

梅之文のきよは四位侍従と申す由行海客よは二位中

多かとりよつらされ一人

一女宮 母桂極上駿馬の母の女

らくまはせ給は兼母とよらして御梅の母
乃梅寮人納言と申すは兼母とよらして御梅の母
わらわら一人は兼母とよらして御梅の母
わらわら一人は兼母とよらして御梅の母

● 先帝

式部卿宮 母

えい昔のついでにさし女は式部卿の御給
落雲女院 母右相兼よらせよ右服の口文
相産の文取らせは兼母とよらして御梅の母
と申すは兼母とよらして御梅の母

あつこめなる人ごとくは内侍のときを奉りて
相産のきよらりしつり給く藤産のき
由着の由事なりしはあねと事のおり
りて中を給はるりし条法中おとやうし
河よりあひくよまつり給く冷泉院より
と給お葉のきよきよは朱雀院母后とこえて
中よりしと給はるりしは後拂也よ
二月よりしとやうし給く道よ入給くは
くのきよは天上天里にありしつり宣旨く
ふりてお封とそらるる高雲のきよは三月より
くれと給はるりし母后相産あつこめ給
つやく日のあつこめ

源氏宮

母をとりしつりしつり藤のきよ

朱雀院のきよはつりしつり給く女とよと
うと給院ありしと給く後と給はるる藤也
あつ

源中納言

若君

朱雀院の中よりあつこめは法樂よと
藤草也

えい兵衛督とやうしつりしつり中納言とえつり

中将

侍従

兵部大捕

つし三人妹のきよおのあつこめ給しつり
文のあつこめつりしつりしつりしつりしつり

兵衛督

あつ

の由中よきこれ終るふいとあつらうとてこれ終る也
まのそとらありふ

・ 攝政大臣大納言引入の母も有り

相産のそよなをたして運使のうりせし人
とせばくはきよ大納言にやく攝政大臣兼三
いらしの人也。高雲のそけ正月ようせを運使の
御あうとて高雲の母をらあり

教仕大臣大納言

母は上天皇正屋の母三女也

相産のそよは藤人女が帯まきよは中納言兼
の賀乃きよよ正四位下兼賞 葵乃きよよ三位中
納言乃きよよ宰相の中納言らんくうり身と
はくしのきよは権中納言高雲は権大納言也

くをそあちととむれし女は内大臣めく源氏の
ゆく世の中乃ゆくとゆりね内後 藤乃妻兼
よを政大臣若菜兼よは教仕表となりてこもり
終るせ終よきりゆい梅よきりゆい源氏の
こぶくと核授よ二条のゆりゆり

方中弁

まのひらきゆはきよよふし源氏のゆりゆい人
よまのりくゆりゆいのゆりゆい

藤大納言

権中納言

母 藤乃ゆりゆいのゆりゆいゆりゆいゆり
つらゆりゆいとゆりゆいゆりゆい

ゆし二人源氏之條女のゆりゆいゆりゆいゆりゆい
目りゆいのゆりゆいゆりゆいゆりゆいゆりゆい
まをきよび二人し女をきよあり

葵上

母らんゆりゆい

相重きよは源氏よあひて夢のきよは夕方のとねと
うし終りくつれ給八月十余日源氏十二元服重貴
上十六より合給

柏木権大納言

母三条左大臣左大臣君実りつものすしそひか
つしよせつし人

し女のおよはたを女将胡蝶のきよは中ねよあやぐり
大よ以中ねあきまのきよは参議志忠のきよは
中納言 カミ 二子のきよは乃中ねすあひさふれて病
ざりるあはれに柏木のきよは病のうらにぬくか
のち納言よかりてはうくし給のあきまのきよは
とつひに

紅梅太人代

母徳子よ日

柿のきよは殿とゆりさうり物言に弁女給若

榮よ以弁紅梅よ按察人給とて也作はよた
と長よかりてたをたねと ケン 兼顔のまけと
ぶの目さういふくさ妙うさひし人也

頭中将

藤原京殿女御

母お少方の殿

紅梅のきよはゆいさういふさあつすへりさ藤原
殿の女御とゆの也

中君

母女御よゆか

紅梅のきよはさあやうりあきよは後按察大納言の
お梅のゆいさういふり

大捕

母長持の娘也

紅梅のきよはさういふさ殿とゆりさうり白き

文やしゆーがりま

弘徽殿女御 コキデンノ 母を悪き日

身とづーのきよは十二のめく心よまづり

院れ女二乃は母之縁合と結し一付た

夕秀人の物小方 母様家より飛去の小方

ゆさうくーりうーんれと縁交よやーあられて夕

雪のゆーくーもよゆひのく結さぞれりいん

いさうーあやや雲井の層も致しんやとす

うーんや花裏葉のきよよゆーん宰中物也

笑しー時父を居ゆしやうまよ

左忠清 母

藤宰相 母

い二人夕秀れゆーのよまよきんまうーひさめ結

しや三う取きうーいんこぶ方ゆーうー

右大弁

柳本権大御まうーりふゆー時一葉の文乃ゆ

るしやぞれーん

中将

若人少将

昔夜をよかゆーんさうり様指きー公卿君とよ母

い二人夕秀のゆーのきよさうらあきこ殿と結

し時お具ーんこゆらのとれさうーそり夕秀

のよね一條まうーひ結し時うーとさうてら

のゆーれゆ役あきあされしゆひうーうー

とゆーんうーん

玉鬘

回やぐめのとれが武よりして舞臺へくらくまうして
のらむづくのそよりふる人のりう原氏なりたて
つねよりぬるま系流よじりよりぬる原氏の内は
のこころよりより桂極よ頼忠のふれおとすのこ
時じよりぬるま系流よじりよりぬる原氏なりたて
のこころ

内子ナカコ ナカカリノ

若の妻をふりせりつよなりつりつよなりつよ

を江君

母はれももろくはなりのりぞいりつりつりつりつり
しりぬるま系流のいさよふりつりつりつりつりつり

くらくらつりつりつりしんやあまつりつりつりつり
くめをよとらむわつりつりつりつりつりつりつり
とらむよとらむわつりつりつりつりつりつりつり
くらくらつりつりつりつりつりつりつりつりつり
あづのつりつりつりつりつりつりつりつりつり
とらむよとらむわつりつりつりつりつりつり

● 二條大政大臣

朱雀院のくらくこの四世をいりつりつりつりつりつり
とらむよとらむわつりつりつりつりつりつりつり
あづのつりつりつりつりつりつりつりつりつり
とらむよとらむわつりつりつりつりつりつり

大納言

頭弁母

お院うねをせ給く後深氏のとむせの中まことば
くゆりされきりは雲林院よ三三目くりりてま
文のゆくまのりまのり白虹日とつてぬ
をりし備^ズり人あり

藤原京殿女御母

未推院出位の時乃女御以弁の母

右中弁母

四位女将母

此二人深氏中將母がら月夜のはのりりしぬ
のりまらぬまのりておの陣よ人まのりて

お院うねをせ給く後深氏のとむせの中まことば
くゆりされきりは雲林院よ三三目くりりてま
文のゆくまのりまのり白虹日とつてぬ
をりし備^ズり人あり

お人女将

らゆりての者のまら給く後深氏のとむせの中ま
まのりまのりまのり白虹日とつてぬ
をりし備^ズり人あり

弘徽殿太后

未推院母

夢のまよるまのりまのりまのりまのり
日まよるまのりまのりまのりまのり
まのりまのり

神宮女方

四君

致仕、大の女房、梅本の女房、雪の梅、大の女房三人、母、
弘徽殿、女所のいりうと

勝月、内侍 母

南殿の女房の事、よ、
御膳の後、藤原中納
言の御、
るよ、
物ぞ、
笑とも、
始、
ち、
也、

ま、
よ、
此、

大長

今、
し、
回、

髪、大長 母

お、
お、
お、
お、

とも今上の御母なり

義香殿女御

今上御母朱蓋院の御母にせまうりし御母にせり

次中将 母

大原院御母大納言とありし御母の御母にせり
さ中納言しし御母の御母にせり
ねよあくやせやうりし御母にせり
どしらつておしりて御母にせり
おそく又ありし御母にせり

女御

次白河院位の白河の女御にせり

藤中納言 母 藤中納言の御母

竹内院の御母にせり
いしり

大納言 母 大納言の御母

あまのしよありし御母にせり
さこの人えの中納言にせり

大納言 母 大納言の御母

あまのしよありし御母にせり
大納言にせり

次中将 母 次中将の御母

えの御母にせり

真木権上 母 真木権上の御母

若菜権上は御母の御母にせり

つら紅梅ちまたの梅葉ふ細きとみくし一町より
つよひそめ終てゆきめかえりてらくたむくつ
の内宿のつこよふふそめ終一はらうくおの方よ
具してゆかりの文よそり終一時この姫君
控箱はまれとよりあそりわゆ一一人こし
次泉院女御 母あうくの内宿のつこ

竹川乃きよは月は院へまつりあふ二文女二文の
は母之秀のたはつゆ子宰相中将あ人か将よ
え一はむつてく人こ

内宿のつこ 母日

竹何きよは女の内宿のつこのゆつりよえて内宿た
のつこはあつやがして内へまつり終竹川は中一悲この

お大后

藤壘女御

今上ま文の四時よりまつりあつり一がぬふの
女御よきとこれまつりて世の中をさしゆへ
ゆりこれまつり女二つあがつりここと終く
やうりあようせまふ竹何よえこつり

大后

修理大史

つと二人女御の一段よあつり

大后

入道橋と守

えい進忠中将よりきりさつちかおとさりて懐正守
よなりしに徳をそくかへ地のりんまぢぢく
かかきれがいのふよさらんごうまらんまぢぢとさ
てうしらめんして明正浦より幸はまごりされ
よきり。源氏ちねはさの浦よりつとねしは後
のつぎよせつらつとてむらむらうしよせめつら
むそめのさいついいでさね中流のうしをさ
せれねしとさしてこの世よのころあひるして
りの浦とさりてれらつとさよりりめつんの入
道とつとあふしやまよのころかちよりおそく

明石上

母丸中務文のむらこ

源氏の浦よとつとまひしは幕くといそめね

て申えさうり。松尾よあ浦をさるれてお
へのりりて奔れさくよまじわよ左條院よ
とつりてたのゆこの愛也

按察大納言

源氏の母これかち大たのせく明人の入道
のゆらつとつり

桐森文衣

此島所文衣四事也地別

右院位の内付乃文衣光源氏乃内叔は源氏を
あつく三年とつと秋にせ給ぬ存まりなり
てくまうりあつく内を死ぬる一内轡車は言
とゆりうぶげせ給くも海山へとつら敷三位
よるそらうりま言ひくあまこのれ中より

内りさ給一申 唐揚ヤナギのぬりさり
— 雲林院律師母

源氏雲林院は籠わくちせしは法文と云
— 人源氏の西母と云

大后

「六條御息所

十六のちく前訪よまがりて秋ぬ中女と云り
十九のちく前訪よまがりて秋ぬ中女と云り
の弁文は具して伊勢へくちり給り一掃き
よんてくちり身とづり一のきよは秋文也と云
世給よまがりてくちり給り一掃き後七八日あ
りてくちり給ぬ源氏の思ひ人に伊勢中も思入
ありてくちり給一人のきよの思ひに
くちり給り一掃き行給よと云

大后

宇治宇治女女小方

宇治女この女二人のくちり給り給よ多々の文乃
うへひり一掃き中女君と云り給り給り給り給り

又

紀伊守 大后大后の孫

小野の孫と云り給り給り給り給り給り
くちり給り給り給り給り給り給り給り
— 常陸守常陸守小方

常陸守常陸守小方

宇治の文、山方のり、青い中、舟の志とてさや
ひーが山方うせ給く後河くまうしひ給き
あや、山方の志とせり、文の山方しきりてえ
われらうらふよんく給き、わの志とせり、
てよ、わの志とせり、

左中弁

宇治山方、母くこのあ

推り、山方の志とて宇治の娘志とせり、山方の
母くこのあ、とせり、

弁ら

母抱、志、給のめ、と女、志、の山方、從とひ、
は、腕、せ、り、と、お、よ、昔、の、事、ら、ひ、さ、う、せ、ら
ん、く、宇、治、の、女、娘、志、と、せ、く、後、河、く、ま、う、し、ひ、給、き、

さう、ひ、り、た、と、り

● 山方志、給、中、納、ま、と、ら、ま、く、ま、あ、り

山方志

と、志、の、み、と、と、山、方、の、志、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
の、方、と、ら、の、山、方、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
く、り、と、ら、の、山、方、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
が、山、方、の、志、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
と、ら、の、志、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
て、志、と、ら、ま、く、ま、あ、り、
の、志、と、ら、ま、く、ま、あ、り、

山方志

ら、の中、納、ま、と、ら、ま、く、ま、あ、り、

守はぬくくうりーしはぬひたりきうの雲を
のまらぬくうりのりく日暮るはゆきよはなれ
く後まへみのほの身音ノせきししり
よふくくくくくく後よこくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くく

● 考證文

一 茶生女君

ウのくといちくくくくくくくくくくく

茶生女君のまことよ原氏よあひ茶生女君

茶院よくくくくく鼻えくくくくくくく
とくくくくく茶生女君

● 禪師

原氏明くの海よりゆきくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくくくくくくく
よふくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

● 茶生女君

このくくくくくくくくくくくくくく

● 秘麻京殿女御

梅くくくくくくくくくくくくく

● 按察大納言

又書のと原のくくくくく

五世の君

し女をよみよの華姫よまつりてわがくし
まりくさくぬがら腹のじとめし

本後藤原惟光

母は武乳母

えいあまといひさほのあまよ西のる備の女よ
侍のくさくさあまのひより梅がえよ幸お
よかろ藤原の心身くまれどくしんと

昔侍

し女よ童あまく船よゆらえれく夕方の有るま
の志とあしし時妹のさるる志のくしんと
トめてあまつりし梅がえよ幸お

佐ゆきみさいらくくつまねとりし童が
くさくさくしんと

藤原のむけ

ほひのゆくまきさり路し町の華姫とダ
考らねのちひんあのかくそのきくしと
かりあまをくしとゆめのとけよなら

山河南祭

夕鳥よ惟光が兄のうしとくしり比叡山の法華
書みくくうかのし乃甲九日の伝経とく
しと

少将命娘

母惟光にた

夕鳥の志とくしとめとめとめとめとめと

比る哉のなんぞいふことか
とがの舎ぬや・く・り・も・さ・る・し・あ・の・つ・も・ら・ん
しん

冬河守書 母

人形居りし・由・に・書・よ・か・ら・ん

冬河守書 母

明ふ乳母 母 乳母 書

りの宰相はあゝありし人・く・母・あ・ら・う・や・し
後・と・ろ・あ・く・あり・し・も・ら・ん・さ・る・も・さ・る・も・ら・ん
てんのよ・あ・ら・う・し・ら・ん・と・は・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん
と・明・ふ・の・は・書・の・時・に・さ・る・し・り・し・る・の・備

はらう・は・は・ら・う・し・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん
よ・う・し・の・あ・ら・ん

三位中将

夕歌上 母

教は、右位中将と書かす・時・に・あ・ら・ん
忠・心・の・あ・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん
せ・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん
あ・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん
て・お・よ・う・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん・と・は・は・ら・ん

宰相 夕歌の上の母

宰相書

宰相

宰相

若乃きよありむらうの肉ゆみうこれ女房を系
院よりきき給一人づくの世まなりまどく
せられ一人

● 太宰太武

源氏にの浦よりとらえ給一人は執事よりりの
かりて世女なりまどく一人

— 執事守

若源氏の世よりまどく苑よりまどくまどく
つりきりらうの人武乃役よ源氏の浦へまどく
一人

— 五世の君

若源氏の世より一人也一人の人武よぐては

うへうらうらうらうらうのまよのかりにせ給
よまどくまどく

● 前幡守

若源氏前幡守のまどく

— 源義清

若紫の世より苑人ありまどくつら給つら明名の
まよ源少納言とつ一人のまよは執事^{ユケイ}貞佐
信長病の日赤 し女よ志中弁 近江守とまどく
まどくまどく つら源氏むつら一人つらひて義清惟光
まどくまどくつら一人のまよは男つてまどくまどく
まどく明名の一人はまどくまどく一人也源氏
の君よりまどくの世よりまどく明名の入道

しとめの事ゆゆしき事ゆゆしき事ゆゆしき事
五節君

し女巻よりみきりてし女巻よりみきりて
はとるべし作どしあつし

伊予守

お院々うれしき世終く後き陸よぬくくくく
屋よのわらひきよせぬ空際の君れしこ

紀伊守

源氏中將中河の中方ぶ人のあわつし
のきよは内守よりつる御長とらうくわくはひん
秀人たるとか監

源氏の大おさい院の御後はうまうり終り
時一負トとらり一人也大おはるの備へおと
じき終り時とらひをりて殿上のれを
はらふ終りく世終く身と終りく一は秀
人ゆきいのせうせうとらり松風よまふ
つと終り

秀人か將妻 西の世方とらうせいのきよま

空際の君よりみきりてしとめ紀伊守がひと何版の
妹源氏空際のとわけの終人かづよ一和を
終一人也と後終ひの終としとらひの家
のうととらうれ一人くお大はの秀人かお
らめよまら

孝隆女

えいみらの國々後よりい孝隆女よわらふむぢ
の妻れまうらち中おの妻よゆめし一人の男こ

藤人式部丞

うたの妻乃らうらふ東屋の妻よ田の田使あて白
きりあまうらりうら一人こ

藤人右を御監

母よおの妻よ田屋大おの昔れゆりよおわ
しお母こよあしお藤人右をよあうら

童

母よいよりよおらうらうらゆりうらひんむぢぢぢ
の妻よおの妻よいよりうらうらうらうらうらうらうらうら

いぢ一人

瀧波前月書

源少納言書

ゆと二人今のお方お腹よあうら

少将水方

母よおの妻よあうら

いじこのお将お昔の大おの妻よいよりうらうらえいあ屋
の妻よあつせんうらうらと孝隆守よいよりい
とあつとつておらうらうらうらうらうらうらうら
いひきれいらうらうらうらうらうらうらうらうら

中宮大史

明ら中史のあ史なり

●太宰少貳

おつゝの君れ乳母のゆゑ

姫君は御給とて、さへはくしへらる。但し
てこのからんとせし時、申もさへ病よとてひて
うせぬ。おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ
年、姫君は十とて、おつゝの君れは、さへはくしへらる。
とて、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ
ちとて、おつゝの君れは、さへはくしへらる。

●後み 太宰也

らうせとて、後年、さへはくしへらる。但し
うしてのかり、姫君は、太宰院へ、さへはくしへらる。
そ、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ

らうて、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ
君の共、藤也也

次郎

三郎

は、さへはくしへらる。そ、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ
よ、さへはくしへらる。そ、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ
よ、さへはくしへらる。そ、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ

姉也

ら、さへはくしへらる。そ、おつゝの君れは、さへはくしへらる。そ

共部也

うれん昔のわてうとりのいさね老より
のちり

● 兵部大輔

「大輔令婦」 母を為乳母

母の女房つくまのいひもくははのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも
まのいもつらまのいもつらまのいも

● 按察大納言

女

母は山僧の妹に若衆をよそへり
紫と母早世せし人なり

紫のよ乃母らくのえ納言らよせり
しつら路しやどよすめくちく老もどれ
路しつら路しやどよすめくちく老もどれ
よせりつら路しやどよすめくちく老もどれ
よのちやどよすめくちく老もどれ

● 大納言

藤原殿女御 女御の女御

花散里上

右院の山内女御の四方あり、源氏入るる女御
くそのくらの徳院乃東の山内と申すや
男のやぐれや、さひくく、ゆき、ふ、さか
つ、ま、よ、東院よりつり給

不入系圖人々

中務宮

父方大納宰相中納と申す、一、時むらめ、の姫君と申す、
さとり一人梅えよるくく

上野宮

まゝ中納と申す、一、時女二、三、の山内、申す、
つせ、一、田中務え、と、殿上、よ、り、一人

梅枝大納

まゝ、西、元、服、の、時、女、御、と、申、す、と、申、す、一、
り、給、え、よ、り、て、お、ひ、と、ま、り、一、人

竹河大納

父方の中、く、乃、山、内、宰相、中、納、院、人、が、お、と、申、す、
時、じ、と、り、給、一、人

右大納

お、紫、の、女、乃、日、原、氏、昔、海、波、舞、給、一、
菊、と、り、く、く、一、に、一、人、一、人

右大納

若、葉、の、女、よ、や、ま、ひ、よ、り、て、お、お、
一、人

大納言

右のふれよ朱雀院の勅別當

右邊侍

宇治の細代元の時也よりまうてしる人

大納言

白き初め初遊よまうてしる一宇治の御中せうり
心連よまうり人

中文大夫

ふれと宇治へまうり人

右邊侍

不審
此二人紅紙かたよ梅巻まひ一人人んらめのを
られまうり人

参議次郎左衛門

新文女御入心ま行ち人

兵衛督

源氏松尾のまよ極の御極の目車車乃ちりよ中
將とのまうり人

氏部

又芳のま元服の後あごあつまうり時たる將
と極よい人

太宰丞

えへ受領ままよ太式よまうりまうりま摘ま乃
まうりこのまのま

左中弁

朱雀院の女とま乃御乳母のま〜と姫と乃御事
云衆院は院のま〜とま〜人

左大弁

相違まよ源氏の御〜とま〜と人よまあり
一人年へくねは極の御極よ御事乃のたよ極この
人よまひ〜と人〜と人御院御事〜と〜と
ま〜とま〜

左中弁

又芳のま〜元服の後あごあつまうり日作文の御事
せ人

右人弁

極のま乃日四裏れ出つひよま〜と〜と人松尾乃
まよま〜と〜と

及中将

同まよ御車よのま〜と〜と人松尾のま〜と〜と
ま〜と〜と

糸

世

源中将

一品文の梅家の者よ時々相ひ一人

源内侍

源内侍の少くわひ一人

常陸守

昔のちねのつみとつり東屋よ少将少く聲はな
い常陸守い東屋の者れ中とつりなを中ねとわり
結合よ未雀院より女文の師のいりて人後よと
ま〜〜〜い

右衛門中将

中ね亮

女三文のいさきよ中ねより中ね一人

左馬次

右上天守のい位乃何殿上人西東の地居乃品と
めの物と

馬頭

りをうのれ文乃老の〜〜〜せ〜〜と

式部大補

文章博士

つと二人々書入る時作文よい〜一人文章
博士の題者〜〜と

大内記

夕秀のや〜乃昔れ内師つ〜とあ〜〜と物と
と〜〜

民部大補

〜〜の中務れ文の〜〜と〜〜と〜〜と
人

源氏式部

左院位のい内乃六位文章生也。右和物語乃い
なり

源氏内侍

源氏の乃幸乃日物文あ〜と源氏の〜〜のり〜
ま〜〜〜人

民部丞

源氏乃家〜〜人

馬助

源氏のつ〜れ日夕秀れや〜中ねと〜〜時
ひ〜〜と〜〜人

筑前守

大楠命ぬきまうらした徳川の乳母ぐやう

和泉前守

おりら月夜の内侍乃女房中納言の老女ぐやうとあ
業乃上よとていり

右左衛門

又勇次お家入小野(出) ちりしん

左衛門大進

くまの火とちりしん

右大臣殿

梅家大納言 式部大進

在泉園人けりり
赤尾のきよあり

大藏大進

業人の家入おふりしん
ゆきよの舟のきよとていり

紀伊守

是もおの家入おふりしん
いしおの舟のきよとていり

時方

白文の家入おの舟のきよとていり
ゆきよの舟のきよとていり

因幡守

ゆきよの舟のきよとていり
いしおの舟のきよとていり

大進監

筑業おの舟のきよとていり
いしおの舟のきよとていり

お山僧如

お山の石見見世の上の舟のきよ

横川僧如

高雲の女院乃とていり
いしおの舟のきよとていり

小野僧如

小野の舟のきよとていり
いしおの舟のきよとていり

護持僧如

冷泉院の護持僧人おの舟のきよとていり
いしおの舟のきよとていり

宇治律師

宇治文の山師次泉院よりついで山經より一寺
橋姫よりついで橋姫より律師

如山上人

源氏中将のついでついでついでついでついで

御導師

幼のまゝついで六條院の山名名の導師

妙法寺別當

あつてついでついでついでついでついでついで
この人よあつてついでついでついで

一原直息所

不審
更長ついでついでついでついでついでついで
の文乃母々方よりついで

夕貞姫君

三任中将女夕貞姫君よりついでついでついで十九

桐壺内侍

三代の山門よりついでついでついでついでついで

平内侍

侍従内侍 三つ二つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ

源内侍

お院の内侍の内侍のついでついでついでついでついで
と人年へついでついでついでついでついでついでついで
女君の後源氏よりついでついでついでついで

敏文女別當

一原敏文の自書ついで

大江 大哉典侍 次

鎌倉のついでついでついでついでついで

美文女官

今上美文乃時の女官内侍のついでついで

女院 宣旨

朝貞乃美のついでついでついでついでついでついで
ついで

親貞命女

桐壺女君よりついでついでついでついでついでついで
ついで

弁内侍

結合の時ち方の本ノミのワひらり

五命姫

高雲の女院の女房源氏の由公より

中将命姫

兵衛命姫 づと二人結合の時とさぬの由方人

少将命姫

結合の時梅壺の由方の由公の時ひと引一人

相壺の女母

明入道本番の女母

東屋女

昔の中将の女とつと孝隆女の妻

小宰相君

意大相思人呪ふの女房

按察君

日月のつと女房

弁君

同女房

中納言君

養上の女房源氏あひての別り時と

中務君

同女房源氏あひての別り時と

中将君

同女房

少輔君

同女房源氏あひての別り時と

中将君

同女房

少将君

明中交の由めめと文内女

右道

夕良の女房女まうせて後深成の四方よゆと

少納言君

紫上の由めおとと海のきよ物ひかえ治一人

宰相君

夕務の太右乃めおとと養父もそり深成よあふ母を
院の由付乃せん一殿

中務君

二多院よい一後よ紫上の由方よまうりてゆ一人

弁君

紫上の女房少納言が女と目のよれゆらる推光が
まうりてゆ一人

中将君

紫の紫上の女房くうせ治く居つごの年け四月
まうりの日ひる治ちまうりてゆ一人

少将君

未摘の女房ゆ後がゆ一人

侍臣

同

少将君

明の女房桂の里より姫君ひえらまうりはゆらる物
て四車よのり一人まうりてゆ一人のきよは深成のきよ
ようりつきの別とわいひるゆ一人

侍臣

女三女房めのとくまうり

侍臣

宇治よ乃女房

宰相君

おどくらゆらる乃女房の女房

大吏君

おどらるの文とらつぎ一人

中納言君

おれ一女房近江君の御一書一人

弁君

むづぐづの女房

小侍従

二不文女房梅本のふきり乳子

木二君

おきぐろちねの女房ゆめのらん少きとろり治
一よどのがこれ女房少くとどろり一人

中将君

曰

按察君

二不文女房源氏時とねり治一人

小少将君

一条文の女房人守ととどろり一人
のうらぐらうと

右近君

曰女房

中納言君

紫上の女房とせき後山前少らうくはして中納言
とねぐらり一人

大吏君

かろくの姫君少らうととどろり一人
くらぐこの女房

馴ナレキ云

曰まげご

中将君

曰女房おれかろく一人

按察君

くらぐろの女房ゆひんらとれおきんと
一人

大吏君

宇治の中君の女房姫君二不文へひく
一人

右近君

同女房の捕が女中屋の君中の君乃の御り人なり
一五日のびくし給へりて一人の君乃の御り人なり
よまのり合くし給へりて一人

大捕君

宇治の中君の女房二条院の御り人なり

少将君

同女房

右近

うとまの女房

右近の御り人

侍従

同女房如君三條の御り人なり
へがしておしせりて車乃の御り人の御り人なり
て後一ふえへはつりては

弁御件

明心の子女房の御り人なり

中将君

同女房名にその御り人なり

あてしよ

葵の上乃の御り人なり
ろくそらより一人の御り人の御り人なり

宰相君

中将君の御り人

共済曾孫家石

手習の御り人なり
乃の御り人

小野大石

湯野井の御り人

大蔵水方

赤橋の君乃の御り人の御り人の御り人なり
人なせをよるなり

明石石

ろくの中君の御り人の御り人の御り人なり
る御り人の御り人の御り人の御り人なり

少貳書

かろく御り人の御り人

大式乳母

源氏の四女のと惟光女御令ぬるどが母

左邊乳母

同四女のと大式乃女のと兼て治るははらきり坂
筑前守が母よりなりてらざりて備令ぬるが母

大式乳母

三條の上れめのととのくろくろめよき位とくせせ
りい一人

室ね乳母

夕ざりのもどろめのと

こもも

よのくろ乃女房

侍従

日

無名人

一人

東の御指は馬の指はひきり一人

一人

同巻御指は馬と引一人

一人

同巻御指は武能がかりひきり物士のひきりめのとて御指の
さしやうがひきり一人

一人

赤糸よりりのひきりひきりこのひきりこの腕とあわ
りひきりしてあさひきりひきりひきりひきり一人

一人

源氏の花のりり里ひきりひきり中川のまきりひきり
さしやうのひきりひきりひきりひきり一人

一人

あざり木のあひきりひきりひきりひきりひきりひきり
ひきりひきりひきりひきりひきりひきりひきりひきり

三人
一人
一人
一人

胡蝶乃きりまの山よりあまのりて介た
てまうり一人

あつらひの山にまめ三雨のれあつらひよなまり
ていのがねとまうりてまうり一人

宇治の中女の房早藤よまなまらうりひび
山車よせうりよ太鼓の煮うりてまうり一人
よまなまらうり一人
まうり一人
まうり一人

東屋老よ孝隆守女をわらぬ媒まうり人

卷之次第

一 桐壺

源氏誕生至十二卷
十三四六卷又えい

二 帚木

十六卷又

三 空蝉

同又

夕顔

同自又
至十月

四 紅紫

自十七卷三月
至冬

末摘花

十七卷
十八日

五 紅紫

十七十八月

六 花宴

十九

六 葵

自廿一至廿二卷九卷
不見紫上十四卷二年事

七 柿

十九

八 花教里

廿四又

九 次麿

廿六廿六

十 明石

廿六三月廿七
改京七月

十一 御七

廿七廿八

蓬生

十七八又

園屋

廿八九月
廿九又えい

十二 综合 元

十四 落雲 元

十六 少女 元二 元四

初音 元六月

螢 日友

篝火 日秋

行幸 元六月 元七月

栞任 元九月

十六 梅枝 元九月

十三 松風 日

十五 橙 元一

十七 玉鬘 元二

胡蝶 日三四月

常夏 日六月

野分 日八月

藤袴 元七八 九月

十九 藤裏葉 元九月 十月

廿 若菜上 元九 元十 元十一

廿一 柏木 元十八

鈴虫 元十

廿四 御法 元十一 元十二

廿六 雲隠

红梅 元十九

宇治十帖

一 橘娘

三 總角

同下

廿二 横笛 元十九

廿三 夕雾 元十八 元十九

廿四 幻 元十二 元十三

廿七 白雲 元十四 元十五 元十六

竹河 元十四 元十五

二 推車

四 早蕨

六 宿本

六 東屋

七 浮舟

八 蜻蛉

九 平習

十 夢浮橋

清少納言作加卷く名

橘人

菓守

八指

さーく

花見

嵯峨野の上下

古物語名

伊勢

竹取

うつら

後衣

作者大式三位
紫式部女也

正三位

隠蓑

岩屋

ゆらぐ

任吉

濱松

こまろ

清松孝子

あゝ舟の少将物語

清松孝子

唐守

藤姑射

大和

左京滋喜作或ハ
花山院製作云々

源氏教本事

行成心

自筆

今世不傳

源克行

ハ八本と校合本云々

冷泉中納言朝隆本

堀川右大臣後房本

号黄表紙

従一位藤子本

尚家相傳

去所門左大臣女
号赤紙如政取

法性寺園白本

唐紙小字子
号尚侍殿本

又條三位後成軍本

京極中納言定家本 号青表紙

一源氏ノ寛弘始一條院世代より出現して世より世より
中康和の末堀川院御代也

一水原抄 大監物光行作也

一紫式部ノ鷹司殿宮女也お繼て上東門院御代也

一武部墓所ハ左雲林院白毫寺南也

一武部檀那院贈僧正ノ許可とて天台一心三觀の血

脈ノ入リ

一河海ハ善成公ハ丹波成忠守朝長ノ傳人也

一紫明抄十卷 親行作 光行子 親行法名寺孫

村上皇女 大鈔院安子 母九条右丞相女

上東門院 八十七歳 法名清淨光 法堂園白女 後一系後朱雀 二代國母

宇多天皇 仁和一 寛平九

醍醐天皇 昌泰三 延喜七二 延長八

朱雀院 三系朱雀也号後院 兼平七 天慶九

村上天皇 天曆十 天徳四 广和三 康保七

冷泉院

安和二

此一冊依桂苑主而望以家中加書寫者也

天文十九年六月日

批筆宋央判

同廿七日一授合

愚案此系圖之人名及註之小書等不審
之事不少也蓋以河內本青表紙等之
本有差異之故乎且又展轉書寫之誤
乎雖然今任所持之一本而強不加私
勅考者也追而以正本可改矣

